

「ホーム」から「要塞」へ
—フランク・J・ウェップ『ゲリー家と友人たち』における
黒人ドメスティシティ—

増 田 久美子

I ストウへの挑戦

アメリカ黒人作家フランク・J・ウェップの小説『ゲリー家と友人たち』が1857年にロンドンで出版された当時、この作品がアメリカ国内でどのように評価され、そしてどの程度の反響を呼んだのかをわれわれが知ることはほぼ不可能である¹⁾。だが、ハリエット・ビーチャー・ストウおよび英国の奴隷制廃止論者ヘンリー・ブルーム卿による序文が冠せられたこの作品を反奴隷制小説の類である^{アボリショニスト・ノベル}と期待した読者が少なからずいたとすれば、ウェップの小説が好評を博したということにはなかつたはずだ。さらに、一世紀をへた1969年の再版のさい、異人種間混淆や人種暴動、パッシングなどのテーマを「本格的に」扱ったこの作品は、「北部の自由黒人の生活やさまざまな問題を描写した最初の小説」として「のちの黒人小説をおおいに予感させる小説」であると指摘されたにもかかわらず²⁾、その後もこの小説は同時代黒人作家ウィリアム・ウェルズ・ブラウンの1853年の小説『クローテル』よりはよく描けているが「独創的とはいえない周辺作家」による作品という枠を越えることはなかつた³⁾。ようやく1990年代になってウェップの小説が再評価されはじめ、この作品のなかに種々の問題点を追究する論考が現れるようになるが⁴⁾、それまでのこの作品にたいする不当な評価——というより、むしろ「一般読者や研究者からの歴然たる無視」といったほうが正しいかもしれない——も、じつは理解できなくもない。一見、感傷小説の鑄型からできた反奴隷制小説と思わせる『ゲリー家と友人たち』は、実際はアメリカ北部における人種や階級の問題について「ドメスティシティ」を通して糾明した作品であつたのだから、このような小説にたいしてアンテベラム期の読者、ことに白人奴隷制廃止論者たちが反奴隷制小説として後盾をすることができず、難色や困惑を示したであろうことは容易に想像がつき、また、20世紀の（黒人）読者たちがこれを黒人小説の伝統的特徴ともいえる^{プロテスト・ノベル}抗議小説と呼ぶには、いささか「温厚」⁵⁾ではないかと懸念したのもうなずけよう。しかしながら、かれらがこの作品を無視せざるをえなかつた最大の理由とは、そこ

に描かれた黒人の様態が（読者の期待に反して）非人道的な境遇におかれた南部の奴隷たちのそれではなく、白人中流家庭を模倣する北部自由黒人の家庭生活であったからにはほかならない。たとえば、ある批評家は『ゲーリー家と友人たち』に登場する自由黒人たちについて、「白人の価値観と同化」し、その「生活があまりにも白人のそれと似通っているので、読者ははたして黒人の物語を読んでいるのかわからなくなる」と非難し⁶⁾、また、1960年代にこの作品を好意的に評価した批評家でさえ、黒人たちが「白人中流階級をみずからの模範」として白人たちの「話し方、洗練された作法、道徳観、そして金儲け」に追随してしまっていると指摘する⁷⁾。

だが、白人女性作家たちの家庭小説や感傷小説にみられるような〈ポリティクス化されたドメスティシティ〉——家庭の秩序を基盤とした母親的・政治的言説によって、社会改革が目指されるドメスティック・イデオロギー——を黒人女性作家が利用し、それが人種および性的抑圧への抵抗と政治的欲望の観念化として機能するとすれば⁸⁾、黒人男性作家であるフランク・J・ウェップがドメスティシティを流用したのは、たんなる白人の価値観の受容や模倣を示して白人社会への同化を表明したのではなく、やはりアメリカ黒人として何らかの改革を試みたのだといえまいか。たしかに、アンテベラム期の自由黒人にとって白人中流階級（北部的白人ドメスティシティ）を模倣することの社会的・文化的意味を確認してみると、かれらの模倣行為は抑圧への抵抗と自治能力の顕示として白人支配社会にたいする脅威となりえたのかもしれない⁹⁾。しかし、そのような模倣行為、すなわち、カート・H・ウィルソンのいう「ブラック・ミメシス」がいかに白人にとって脅威になろうとも、それは白人との同化によって黒人たちが安定した権利および社会構造に参加したいという欲望に滞留してしまう恐れがあろう。『ゲーリー家と友人たち』には、白人ドメスティシティの模倣行為を超える独自の黒人ドメスティシティの形成がみられるのである。

この小説の序文にて、ストウは「いま奴隷とされている黒人種は、自由や自治、そして進歩することが可能なのでしょうか」¹⁰⁾と疑問を呈している。これに答えるべく、フランク・J・ウェップは黒人ドメスティシティにかんする言説を展開したのであり、本稿ではその探究を主題としたい。黒人ドメスティシティを通して、われわれはかれらの抵抗や黒人コミュニティにおける自治能力のみならず、かれらが黒人であると同時にアメリカ共和国市民でもあるという「シチズンシップ」の確立についての可能性をもみることができるだろう。

II 清潔さへの欲望,あるいは異人種間混淆という汚濁

『ゲリー家と友人たち』には中心となるふたつの家族が登場する。ひとつは小説のタイトルにも表出されている南部のゲリー家である。その当主クレランス・ゲリーはエミリという黒人女性を妻にもつ裕福な白人農園主であり、ふたりのあいだには「アフリカの血統の痕跡などまるで見えないように見える」⁽¹¹⁾息子と娘がいる（やはりクレランスとエミリという名が与えられている）が、法律上は母親のエミリおよび子どもたちは黒人奴隷である。ジョージアで優しい夫の保護のもとに「申し分のない楽園」(65)のような生活を送っているものの、エミリは自分の子どもたちが奴隷であること、もし夫（事実上の彼女らの奴隷主）が亡くなれば子どもたちは売買されてしまうことをつねに憂い、白人との法的な結婚と子どもの認知が可能な北部への移住を希求していた。いっぽう、北部フィラデルフィアの黒人コミュニティに暮らすエリス家は、大工の父親と母親のエレン、長女エスタ、次女キャディ、末息子チャーリーの三人の子どもからなる「たいへんりっぱで勤勉な黒人家庭」(16)であり、家長である父は教育熱心な元奴隷である。安逸な日々を送るゲリー家にたいしてつねに精励するエリス家という、この〈南部／北部〉の対極的な両家は、そもそもその生活背景が〈南部の貴族的・封建的奴隷制社会／北部の近代的市民社会〉という対立項を基盤としているが、なによりも作者が意図しているのは、ゲリー家は人種統合という夢を、エリス家は純然たる黒人種によるドメスティシティ形成の可能性をそれぞれに表象している点だろう。それは、ゲリー家の4名がフィラデルフィアに移住し、その北部の地でことごとく悲劇的な結末を迎えることを鑑みれば、ゲリー家に象徴される異人種間混淆はけっしてウェップが称揚するものではないことがわかる（ゲリー氏はフィラデルフィアで起こった人種暴動のさい襲撃をうけて殺害され、そのとき身重であった妻エミリも死亡する。さらに胎児は死産——まさに白人と黒人の人種的融合を否定する最たる象徴といえよう——し、また、孤児となり白人として生きる息子のクレランスはのちに黒人であることが露呈すると、白人女性である最愛の恋人との婚約を破棄され、病死してしまう。唯一、黒人として生きることを選び、チャーリー・エリスと結婚をする娘のエミリのみが幸福になる）。すると、反奴隷制小説でもなく人種統合を謳うわけでもないこの小説において、エリス家に代表されるような黒人ドメスティシティにその重要な意味を見いだすのであれば、そのもくろみとはいったい何なのだろうか。

小説のタイトルと矛盾するが、物語の中心はゲリー家ではなくフィラデルフィアのエリス家の子どもたちであり、そして同じ黒人コミュニティに暮らすウォル

ターズ氏という小説における実質上の英雄的黒人男性である。ストウの序文にあるように、アンテベラム期フィラデルフィアには「ひとつの巨大な階層」として「〔黒人〕自身による特異な社会」(ixx)が形成されていたが、実際、この黒人コミュニティは北部最大の自由黒人人口を擁するばかりでなく、ジェームズ・フォートンやロバート・パーヴィスといった北部黒人の指導的人物を数多く輩出し、全国黒人集会をはじめとする黒人運動の拠点としても、ニューヨークとともに重要な北部黒人社会のひとつであった。また、同コミュニティは中流階級のみならず、富裕な黒人たちの洗練された生活や黒人教会を中心に整備された種々の組織の存在という点でも知られていたのだが、そのような自由黒人たちの「白人中流階級の模倣」ともいえる営みが展開されるいっぽうで、じつは酷烈な人種差別にもさらされ、同コミュニティでは1834年から1849年のあいだに大規模なものだけでも5度にわたる反黒人暴動が生じている¹²⁾。『ゲーリー家と友人たち』にはそういったフィラデルフィアの自由黒人の姿や、小説のクライマックスとなる人種暴動の場面が克明に——ふたたびストウの言葉を借りれば「嘘いつわりなく」(xx)——語られているのだ。したがって、アンテベラム期の黒人ドメスティシティを検証するにあたり、中流家庭であるエリス家、および、人種暴動が起こったさいに闘争の場と化したウォルターズの邸宅^{ホーム}に着眼することは、当時の自由黒人を取り巻く「実情」を知るうえでもきわめて有効であろう。

『ゲーリー家と友人たち』のテキストにおいて、黒人ドメスティシティはどのように確立されているのだろうか。本稿で依拠するドメスティシティなる概念は、汚れや不浄——セアラ・J・ヘイルにしたがえば、「道徳上の腐敗」¹³⁾——とみなされる男性的空間の「市場」から切り離された、神聖なる「家庭」という女性の領域を基盤とするドメスティック・イデオロギーについて政治化されることであり、秩序や規律あるドメスティシティを通して近代的主体性が産出されるという役割を前提とする¹⁴⁾。さらにアンテベラム期アメリカの場合、奴隷制によって家庭内に混入される無秩序や不浄から家庭を救出する必要性が生じるため、奴隷制という汚濁に抗して求められる家庭内の秩序こそ、言説上の「清潔さ」にはかならないと考える。このようなドメスティシティと奴隷制の関係から社会改革を目指した19世紀アメリカ文学のテキストといえ、ハリエット・ピーチャー・ストウの『アンクルトムの小屋』(1852)があげられるが、18世紀の「共和国の母」から19世紀の「真の女性礼讃」までのドメスティシティの政治化という伝統において、この作品ではまさに政治的な社会改革とドメスティシティを融合させた言説が実現されている。とくに

女性の「聖域」とされるキッチンの描写にかんして、(奴隷制が家庭に侵入する南部の)無秩序なキッチンと(ストウおよびキャサリン・ビーチャーが理想とする北部クエーカー教徒の)秩序ある整然としたキッチンとの対称性は、奴隷制が市場と家庭の境界線を瓦解してその不浄や無秩序が家庭に持ち込まれる危険性を喚起させよう¹⁵⁾。『ゲーリー家と友人たち』の場合、まず南部の大農園主であるゲーリー家の邸宅にはまさにその奴隷制という汚濁と異人種間混淆という不浄が最初から浸食しているため、ロバート・リードファーが指摘するように、ゲーリー家にはドメスティシティーおよび〈公的領域／私的領域〉のイデオロギーが欠如していると捉えられる¹⁶⁾。いっぽう、エリス家に目を向けると、この家庭の清潔さはおもに無類の掃除好きである次女のキャディ——彼女の清潔への執着はときに異常なほどであり、ヒステリックでさえある——によって体现されるが、それはストウやビーチャーらが提唱するドメスティシティーとは異質の清潔さである。白人女性たちが家庭に求めた清潔さが秩序や規律であるとする、エリス家のそれは掃除という行為そのものを指す。

キャディは訪問客がくるという知らせにかなり立腹したようすだった。彼女はこう宣ったのである。何もかもがふさわしくないわ。家が見るに堪えないほどめちゃくちゃな状態よ。腰を下ろす場所さえほとんどないじゃない！すると彼女は、午後1時に元気よく床みがきや掃き掃除をするための準備に取りかかったのである(45)。

エリス家はけっして整然としたドメスティシティーにあるわけではなく、むしろ「めちゃくちゃな状態」(a state of disorder)にあり、この無秩序はとうぜん奴隷制の混沌や汚れを想起させるが、キャディは「わき目もふらずに小さな客間を占拠して、たちまち驚くばかりのきれいな状態(an astonishing state of cleanliness)にして」(45)しまう。「誰よりも根気のある家政担当^{ハウスキーパー}」(16)と描写されるキャディこそが——元奴隷の母親エレンではなく——汚れを一掃し、一家の清潔の守り手となっている。つまり、彼女にはゲーリー家を蝕むような市場と家庭の混乱や、異人種間混淆という汚濁を食い止める可能性があるということの意味しているわけだが、ではなぜ、本来ならばドメスティック・イデオロギーとして「家庭の帝国」を掌握する母親の役目がエリス夫人に課されていないのだろうか。エレン・エリスは法的には自由黒人であっても、針子である彼女と得意先のトマス夫人という白人中年女性との関係をみればわかるように、まるで白人女主人に追従する黒人奴隷のように

ふるまってしまう点に問題がある。エレンがトマス夫人に息子のチャーリーの教育について相談したさい、「ナンセンスですよ、エレン！〔……〕黒人の子にラテン語やギリシア語が何の役に立つというのです？」(25)と押し切られ、トマス夫人の忠告に従ってチャーリーをある白人上流家庭へ奉公に出してしまう（つまり、事実上の家内奴隷となることに等しい）のだが、汚れ（奴隷制）を家庭から閉め出すべき母親自身が自分の息子を奴隷制に組み込もうとするエレンには、家庭の道徳的衛生を守ることが前提とされる母親的・家庭的権能は附与されえないのだ。

また、エリス家の家庭の空間は、たとえば、人種暴動の首謀者およびゲーリーを殺害した物語上の悪役である白人弁護士ジョージ・ステイーヴンの「薄汚い」仕事場——「その部屋は陰気で気がなく、かび臭く不快な空気を漂わせていた」(162)と描写されている——や、「世間に見捨てられたような顔つきの」アイルランド系移民がたむろする酒場(173)などの白人の公的領域にみられるような、その空間の物理的な不衛生とその空間を占める人物の道徳的な不潔さによっても対照的に表現されている。だが、たんに白人家庭の模倣を超えるさらなる黒人ドメスティシティは、同じフィラデルフィアの黒人コミュニティに暮らすウォルターズの邸宅にみることができよう。

Ⅲ 人種暴動の夜

不動産投機家であるウォルターズは元奴隷ながらその知性と勤勉さにより莫大な財をなしたフィラデルフィア随一の黒人富者であり、そのモデルはジェームズ・フォートンともロバート・パーヴィスともいわれている¹⁷⁾。当時の黒人にたいする人種言説を対蹠化するかのように、「身長は6フィートを超え、すばらしく均整がとれており、漆黒の顔と滑らかでつややかな肌」の持ち主であり、「アフリカ人の容姿とは正反対で、たいへん非凡な顔立ち」(121-122)であると形容されるこの人物は、クリストファー・マルヴィによれば、アフラ・ベーンの『オルノコ』(1688)からマーティン・ディレーニーの『ブレイク』(1859-62)にいたる「英雄的奴隷」^{ヒロイック・スレイヴ}の系列上にあり、混血人の対立項として存在する純血の黒人男性と目されている¹⁸⁾。その非アフリカ的な容貌もさることながら、ゲーリーがウォルターズをはじめて訪問し、「客間」に案内されたさいに描写される彼の邸宅は、ゲーリーが「すっかり驚愕してしまうほど」の「気品」があり、「巨万の富のみならず、洗練された趣味や優雅な嗜好を示した」(121)内部空間は、なるほど、ただ一点をのぞけば白人上流階級を模倣したドメスティシティとなっている——つまり、客間に「ある黒

人将校の肖像画」(121)が飾られていたこと以外は。ゲリーは、白人家庭にはけっして掛けられることはないであろうその肖像画に釘づけになってしまう。

「ああ、あなたもその絵に魅力を感じているのですね」とウォルターズ氏は微笑んだ。「白人はみな興味深そうにそれを眺めるのですよ。将軍の格好をした黒人なんてただごとではありませんから、一瞥して通り過ぎることができないのでしょうかね」。

「いや、まったく、相当めずらしいものですな」とゲリー氏は答えた。「とくに、わたしのような南部出身の者にとっては。これは誰なのですか?」

「トウサン＝ルヴェルチュールですよ」とウォルターズ氏は返答した。[……]「わたしが見たかぎりでは、これはどの肖像画ともかなり違うのですよ。たいていは頭にハンカチをまいた猿顔男として描かれているのですが」。

「この絵からすると」とゲリー氏はいった。「この人物は自分の信念を行動でまっとうさせるタイプのようすな」。

そう話すと、彼は少しのあいだその絵を眺めていた(123)。

多くのアメリカ黒人にとって(そして奴隷制廃止を訴える白人にとって)、ハイチ革命の英雄的黒人指導者であるトウサン＝ルヴェルチュールが自由と平等の象徴であったことはよく知られているが、じつは南部の白人農園主にとっても、仏領サン＝ドマングにおいて黒人奴隷を管理し、事実上の植民地支配者であったトウサン＝ルヴェルチュールについての資質はすぐれて好意的に評価されていた¹⁹⁾。したがって、この場面におけるゲリーのトウサン＝ルヴェルチュールについての無知は、彼がプランテーション経営に関心がなく、その管理を他の者に任せ、南部の美しい邸宅と美しい妻や子どもに囲まれた「楽園」のような生活のみを享受していたのでないかという疑念を起こさせるいっぽう、軍装のトウサン＝ルヴェルチュールの肖像画——これが「ブラック・ナポレオン」と添え書きされた画であるのかは断定できないが²⁰⁾——をウォルターズと重ね合わせてみるならば、やはりウォルターズが黒人革命の闘士として認識されるのは妥当であろう。そして、その指導者としての彼の能力は、ウォルターズとゲリー一家に憎悪の念を抱くスティーヴンが画策した人種暴動によって、見いだすことができる。

『ゲリー家と友人たち』に描かれた人種暴動は、1834年に実際に起こったフィラデルフィアの反黒人暴動をモデルとしているが²¹⁾、小説では第17章「陰謀」(その章タイトルどおり、スティーヴンによる暴動の策略)から第22章「不安に満ちた日」(エリス氏が路上で暴徒に襲撃されて行方不明となり、ウォルターズと長女エ

スタが捜索に出る場面)までおよそ50頁分が暴動シーンに割かれ、白人暴徒が黒人コミュニティを攻撃する描写はまさに圧巻であり、アンテベラム期アメリカでの反黒人暴動という社会的・歴史的現実を読者に提供しているという点で、これをウェブの小説における大きな功績のひとつとして数えあげる研究者もいる²²⁾。暴動により数々の悲劇(ゲリー夫妻の殺害と胎児の死産、エリス氏の身体的・精神的損傷、エリス家の焼失など)が生じ、登場人物たちのその後の人生を大きく揺るがすが、まさにこの反黒人暴動こそが黒人家庭の領域を人種闘争の爆心地とさせ、小説においてはウォルターズの邸宅を主軸に、黒人コミュニティおよび黒人ドメスティシティを強固にする契機となっている。

黒人たちは白人暴徒にたいする防衛のためにウォルターズの邸宅^{ホーム}に結集する。エリス家のような中流階級だけでなく、チャーリー・エリスの悪友キンチのような下層黒人にいたるまで、あらゆる階級の黒人たちが集い、家庭というドメスティックな空間を基盤に黒人コミュニティの互助的かつ政治闘争的機能が強化されるのである。「要塞」(203)と化したウォルターズのホームでは彼の指揮のもとに黒人たちが応戦するという緊迫した状況となるが、では、このようなホームという女性的空間であると同時に闘争の砦となった非女性的な場において、エリス家の女性たちはどのような行動をとっていたのか。母親のエレンは大量の銃や弾薬を目の当たりにして、「なんて恐ろしい!こんなにたくさんの武器が散らばっているなんて、気がどうにかなくなってしまいそうだわ」(204)と恐怖心を述べるにとどまるが、一家のハウスキーパーである掃除魔の次女キャディは、きわめてドメスティックな闘いをキンチ(のちにこのふたりは婚約する)とともに展開するのである。

ついに白人たちがウォルターズ家に侵入し黒人側の防戦が破られそうになったときに、上階から暴徒らの頭に「ひりひりと灼ける湯」(214)がまかれ、危機を免れる場面がある。この熱湯の正体を確かめにウォルターズが二階へと急ぐと、キャディとキンチが湯沸かし釜に唐辛子入りの熱湯を準備していたのである。

「わたしたちは熱湯で闘うわ。みて」とキャディは柄杓を持ちあげた。「これがわたしの武器よ。やつらはキーキー泣くと思うわ」。

「よくやった、キャディ」とウォルターズ氏は答えた。「非常によくやってくれた。すっかり白人どもを追い出してしまったようだ」と窓の外を覗きながらいうと、「とにかくやつらは去ったようだ」と頭を引っ込めた。「また戻ってくるかどうかはわからないが。熱湯をたっぷり用意しておいてくれたまえ」(214-215)。

そしてキャディは釜や柄杓の他にも、キンチが仕掛けたという「柄の端に大きなブリキ缶をぶら下げた箒」(215)をウォルターズに披露する。キャディたちの闘いぶりを「幼稚な秘密兵器」と過小評価する研究者もいるが²³⁾、湯沸かし釜、柄杓、箒といった家庭の小物を武器としたこと、また、いわばこの防衛の指揮官である(トゥーサン＝ルヴェルチュールと同一視される)ウォルターズからキャディが〈ホーム＝要塞〉の入り口の守り手に任命されたことは無視できない。キャディは母親のエレンにはできない重要なドメスティックな役割——白人暴徒という汚れ、ないし異質なものの侵入を防ぎ、一掃するという一家の守り手——を担っているのである。

もうひとりのエリス家の女性、長女のエスタはどうであろうか。通常、彼女は母親とともに縫いものをし、家庭の領域から逸脱することのない穏やかな日常を送るうら若き黒人女性であり、その生活風景はときとして中流階級の白人女性かと紛うようである。だが、(読者の不意をつくように)エスタはこの人種暴動によって北部的白人ドメスティシティーの枠を超える女戦士に変貌する。武器の前でおどおどする母親を横に、「わたしが男だったらよかったのに」と語り始める。

今日、通りを歩いていて、おおぜいの罪のない、わたしたち自身のような人たちを見たわ。あの白人の卑劣なやつらに、少しの危害さえ加えたことなんてない人たちを。[……]とくに、気の毒な女のひとに気づいたの。そのひとは腕に赤ちゃんを抱いて、かわいそうに、つらそうに泣いていたわ。身の安全を守ってくれそうなどころなんてないと知っていたからだわ。白人の男が何人か立ち止まって、そのひとをなじったりからかったりしていた。あいつらを絞め殺してやりたいと思ったわ。わたしが男だったら、その場でやつらを殴りつけていたでしょうね。次の瞬間には殺されてしまうかもしれないけど(205)。

白人男性による黒人女性への嫌がらせという光景について、通常ならばその不快さは抑圧されたままになっていたかもしれないが、ここでは反黒人暴動という人種をめぐる直接的暴力によって湧出された感情が率直に吐きだされている。エスタのことばのあとに母親のエレンは、「そんなふうにはだめよ。女性らしくないし、キリスト教徒らしくないわ(it sounds unwomanly — unchristian)」(205)〔傍点引用者〕と嘆願するが、さらにエスタは「ピストルを手にとり」、「ボンネット帽を脱ぎ捨てて」(206)、ウォルターズに弾薬の装填方法を学び、彼とともに闘うことを

みずからの意志で決める。まさにエスタの「女性らしからぬ——キリスト教徒らしからぬ」言動は、白人ドメスティシティの模倣を超えたヒロイックな黒人女性を仕立てあげているといえよう。その後、この暴動をきっかけにエスタとウォルターズは結婚することになる。

人種暴動によって明確になったのは、ゲーリー夫妻と胎児の死による奴隷制および異人種間混淆の絶対的否定、そして、黒という色（すなわち黒人）と汚れを同一視していた当時の一般概念²⁴⁾を反転させ、白人という不浄を家庭の領域から一掃し内部空間を浄化するという黒人ドメスティシティの確立である。ドメスティックな武器を手にするキャディと、ドメスティシティを逸脱し男性のように闘うエスタというふたりの黒人女性の行動によりウォルターズのホームは守られ、いうなれば、彼女たちの母親エレンやエミリ・ゲーリーには成し遂げることのできなかつた新しいタイプの黒人女性像が提示されているのだ。暴動後のキャディとキンチの婚約が階級間を超えて結束する黒人コミュニティの拡大を意味するとすれば、エスタとウォルターズの結婚は何を意味するのだろうか。ここでいま一度検証する必要があるのが、ウォルターズの客間に掛けられているトゥーサン＝ルヴェルチュール像についてである。ロバート・リードファーの忠告するところによれば、トゥーサンを抵抗と黒人解放にかんする人種闘争の象徴としてのみ捉えることは、彼の人生についても彼が起こした革命についても真実を歪めることだ²⁵⁾。たしかに、C・L・R・ジェームズの大著『ブラック・ジャコバン』（1963）に描かれたトゥーサンのように、サン＝ドマングにおける革命がたんなる黒人奴隷の蜂起ではなく、フランス革命という共和国理念の延長としてみなされていたとすれば、その著書のタイトルのごとく、彼は黒人であると同時にフランス共和国市民であったのである²⁶⁾。すると、ウォルターズが所有している肖像画の軍装のトゥーサンが黒人たちの自由の象徴というより、むしろ共和国市民であることを強調しているのであれば、ウォルターズという人物もまた、黒人でありながらアメリカ市民であることの証左として読むことは不可能だろうか。さらに数年後のウォルターズの家には、あらたな肖像画が加わることになる。

トゥーサンの肖像画と真向かいに掛けられているのは別なる絵であり、たしかにその黒人の武人よりも高い位置に掲げられている。それはいま窓辺にたたずんでいるご婦人——エスタ・ウォルターズ夫人、旧姓エリス——の肖像画である。絵のなかの褐色の肌をした赤ん坊は、母親と横並びにしているほうが妹であり、母親のひざか

ら人形のドレスを引っ張ろうとしているもうひとりの子どもが姉である (333)。

新しい黒人女性として認識されうるエスタと、アメリカ黒人であることを強調されうるウォルターズの結婚は、いまやトゥーサンの肖像画より高く掲示され、母親となったエスタに表象されているように、奴隷制および異人種間混淆という汚濁が排除されたアメリカ黒人家庭の安定を強く示唆していよう。『ゲーリー家と友人たち』はエリス家の息子チャーリーとゲーリー夫妻の遺子エミリの結婚式で幕を閉じるが、その祝賀の食卓で給仕されるのが——まるまると肥えた肉厚の七面鳥のローストから、イリエガメのスープ、ゆたかな牡蠣料理といった北部名産品の皿にはじまり、南部特産の色とりどりの果実やデザートで締めくくられるという——まさに「アメリカの食事」(377)〔傍点引用者〕なのだ。それは、『アंकルトムの小屋』にて自由を求める黒人ジョージ・ハリスたちが、アメリカを去ってアフリカの西端リベリアへ行かざるをえなかった結末とは大きく異なり、ウェッブの小説における黒人たちは数々の人種差別を被りながらも、アメリカ市民として生きることが強調されている(ただし、暴動によって身体と精神を冒されたエリス氏を物語の最後まで生かすという、黒人コミュニティ内における唯一の暗澹たる設定は——作者のその意図は定かではないが——なおもアメリカ黒人たちの苦難を暗示させなくもない)。フランク・J・ウェッブが描いたフィラデルフィアの自由黒人たちの姿は、もはやストウの序文における疑問をはるかに超えていよう。この作品によって黒人自治の可能性が示されただけではなく、アンテベラム期アメリカという時代において模索されうる新しい自由黒人像が差し出されたのである。

註

- 1) Phillip Lapsansky, "Afro-Americana: Frank J. Webb and His Friend," *Annual Report of the Library Company of Philadelphia for the Year 1990* (Philadelphia: Library Company of Philadelphia, 1991), p. 28. Rosemary F. Crockett, "Frank J. Webb: The Shift to Color Discrimination," *The Black Columbiad: Defining Moments in African American Literature and Culture*, eds. Werner Sollors and Maria Diedrich (Cambridge: Harvard University Press, 1994), pp. 115-116. 『ゲーリー家と友人たち』が出版された当時の書評は英国のいくつかの雑誌で掲載されていたことがわかっているが、そもそも作家であるウェッブ自身についての資料がきわめて乏しい。彼の足跡を大まかにたどってみると、おおよそ以下の通りである。フィラデルフィア生まれの自由黒人ウェッブは、1840年代に複数の

職業に就きながら「人種向上」の運動になんらかの関わりを持ち（このころ妻メアリはストウと知り合っている）、50年代にジャマイカへ移住し、60年代にはふたたび帰国して黒人解放局およびアボリショニズム系雑誌『新しき時代』にて執筆活動をし、そして70年代にはアメリカ西部へ移住した。作家自身についての研究論文は、ここに掲出のラプサンスキやクロケットの他に以下も参照のこと。Eric Gardner, “‘A Gentleman of Superior Cultivation and Refinement’: Recovering the Biography of Frank J. Webb,” *African American Review* 35, no. 2 (2001): 297-308.

2) Arthur P. Davis, introduction to *The Garies and Their Friends* (New York: Arno Press, 1969), p. vi.

3) Arthur P. Davis, “*The Garies and Their Friends*: A Neglected Pioneer Novel,” *CLA Journal* 13, no. 1 (1969): 27. Robert Reid-Pharr, introduction to *The Garies and Their Friends* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997), pp. vii-viii. いっぽうで、この作品が19世紀的メロドラマ小説から社会的リアリズムへと移行する小説として評価する1970年代の論考もある。R. F. Bogardus, “Frank J. Webb’s *The Garies and Their Friends*: An Early Black Novelist’s Venture into Realism,” *Studies in Black Literature* 5, no. 2 (1974): 15-20.

4) たとえば、ロバート・レヴァインは1830年代から40年代の黒人節酒運動というコンテクストのなかにこの作品を位置づけ、黒人「向上」の試みと白人文化への同化について検証し、アンナ・エンゲルは作品に登場するアイルランド系移民と黒人の描写の類似関係に着目し、いかに当時のアメリカでエスニシティが階級と融合しやすいのかを分析している。Robert S. Levine, “Disturbing Boundaries: Temperance, Black Elevation, and Violence in Frank J. Webb’s *The Garies and Their Friends*,” *Prospects: An Annual of American Cultural Studies* 19 (1994): 349-374; Anna Engle, “Depictions of the Irish in Frank J. Webb’s *The Garies and Their Friends* and Frances E. W. Harper’s *Trial and Triumph*,” *MELUS* 26, no. 1 (2001): 151-171. これら以外の論考については、次を参照されたい。Anna Mae Duane, “Remaking Black Motherhood in Frank J. Webb’s *The Garies and Their Friends*,” *African American Review* 38, no. 2 (2004): 201-212; Henry Golemba, “Frank Webb’s *The Garies and Their Friends* Contextualized within African American Slave Narratives,” *Lives Out of Letters: Essays on American Literary Biography and Documentation, in Honor of Robert N. Hudspeth*, ed. Robert D. Habich (Madison: Fairleigh Dickinson University Press, 2004); Carla L. Peterson, “Capitalism, Black (Under) development, and the Production of the African American Novel in the 1850s,” *American Literary History* 4,

- no. 4 (1992): 559-583.
- 5) Davis, "The Garies and Their Friends: A Neglected Pioneer Novel": 33.
- 6) James H. DeVries, "The Tradition of the Sentimental Novel in *The Garies and Their Friends*," *CLA Journal* 17, no. 2 (1973): 248.
- 7) Davis, "The Garies and Their Friends: A Neglected Pioneer Novel": 30. Golemba, p. 129.
- 8) たとえば、クロード・ティア・テイトは黒人女性作家によるドメスティシティーの流用の例として、ハリエット・ジェイコブズおよびハリエット・ウィルソンの作品を取りあげている。Claudia Tate, *Domestic Allegories of Political Desire: The Black Heroine's Text at the Turn of the Century* (New York: Oxford University Press, 1992), pp. 23-50.
- 9) Kirt H. Wilson, "The Racial Politics of Imitation in Nineteenth Century," *Quarterly Journal of Speech* 89, no. 2 (2003): 89-108.
- 10) Harriet Beecher Stowe, "Preface," *The Garies and Their Friends* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997), p. ix.
- 11) Frank J. Webb, *The Garies and Their Friends* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1997), p. 4. ここよりテキストからの引用は本文の括弧内にページ番号のみ記す。
- 12) Samuel Otter, "Philadelphia Experiments," *American Literary History* 16, no. 1 (2004): 103-116; Levine, 350. 19世紀フィラデルフィアの歴史および人種暴動については以下の文献を参照のこと。David Grimsted, *American Mobbing, 1828-1861: Toward Civil War* (New York: Oxford University Press, 1998); Theodore Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia: A Study of Ex-Slaves, Freeborn, and Socioeconomic Decline," *African American in Pennsylvania: Shifting Historical Perspectives*, eds. Joe William Trotter, Jr. and Eric Ledell Smith (Harrisburg: The Pennsylvania State University Press, 1997); Gary B. Nash, *Forging Freedom: The Formation of Philadelphia's Black Community, 1720-1840* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988); Gary B. Nash, *First City: Philadelphia and the Forging of Historical Memory* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002); Julie Winch, *Philadelphia's Black Elite: Activism, Accommodation, and the Struggle for Autonomy, 1787-1848* (Philadelphia: Temple University Press, 1988); 鶴月裕典「アンティベラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ」『史苑』第48巻第2号(1988): 1-43.
- 13) Sarah Josepha Hale, *Ladies' Magazine* 5 (Feb. 1832): 87.
- 14) ドメスティシティーと近代的主体性の関係については、たとえばナンシー・アームストロングの議論が強力であるが、19世紀アメリカ合衆国の場合、奴隷制という歴史的

- 特異性を射程に入れる必要があるため、本稿ではジリアン・ブラウンの「家庭で形成される個人のあり方」(domestic individualism)に大きく依拠するものとする。Nancy Armstrong, *Desire and Domestic Fiction: A Political History of the Novel* (New York: Oxford University Press, 1987); Gillian Brown, *Domestic Individualism: Imaging Self in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1990).
- 15) ジリアン・ブラウンによれば、ストウが社会を「ラディカルに」改革しようとした——つまり、奴隷制を廃止しようとした——のは、父権制のもとに存在する奴隷制と共犯関係にあった「家庭の価値観」を改革することによって、家庭への奴隷制侵入の否定と女性の領域の安定、ひいては(無秩序な家庭とモラルのない国家という相似関係から)社会的モラルの安寧のため女性を国家的調停者に仕立てることにあったという。同上書、第1章を参照のこと。
- 16) Robert F. Reid-Pharr, *Conjugal Union: The Body, the House, and the Black American* (New York: Oxford University Press, 1999), p. 68.
- 17) Lapsansky, p. 31.
- 18) Christopher Mulvey, "Freeing the voice, creating the self: the novel and slavery," *The Cambridge Companion to The African American Novel*, ed. Maryemma Graham (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p. 25.
- 19) ウォルターズは「猿顔」のトゥーサン＝ルベルチュール像が多く流通されていたことを言及しているが、アンテベラム期の白人奴隷廃止論者にとって、トゥーサンは解放をもたらす「モーゼ」として神格化され、また、連邦主義者たちも彼の軍事指導力を絶賛して「カリブ海のジョージ・ワシントン」と評していた。Alfred N. Hunt, *Haiti's Influence on Antebellum America: Slumbering Volcano in the Caribbean* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988), pp. 84-101.
- 20) Ibid., p. 102.
- 21) 研究者によっては、「1842年暴動」あるいは「1849年暴動」をモデルにしていると指摘する場合もある。James Kinney, *Amalgamation!: Race, sex, and Rhetoric in the Nineteenth-Century American Novel* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1985), pp.93-94. Lapsansky, p. 34; Levine, 357-362; Reid-Pharr, *Conjugal Union*, p. 79.
- 22) Levine, 357.
- 23) Duane, 208.
- 24) Suellen Hoy, *Chasing Dirt: The American Pursuit of Cleanliness* (New York: Oxford University Press, 1995), p. 92.

25) Reid-Pharr, *Conjugal Union*, p. 75.

26) 獄中のトゥーサンがナポレオン・ボナパルトに宛てた書簡には「わたしはあなたの一兵卒であり、サン＝ドマングにおける共和国第一の公僕でもあった」という有名な一説がある。C. L. R. James, *The Black Jacobins: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*, Second Edition, Revised (New York: Vintage Books, 1989 [1963]), p. 364.